

【基調講演】

非行防止につながる効果的な取り組み

長者 善 高

京都外国語大学事務局 事務局長
元京都市立修学院中学校 校長

子どもの心の琴線に触れる生徒指導

皆様、こんにちは。ちょうど私が赴任していた修学院中学校での取り組みについて、これからお話するのですが、一緒に頑張ってくれた油谷先生もフロアにおられますので、パネル・ディスカッションでは私ではなく油谷先生に対して質問をしてもらったほうが、もっと現場の話が出てくるのではないかと考えています。

皆さんのお手元にA3サイズで印刷した資料があると思いますが、これは私が退職するときに京都新聞が掲載した記事になります。私がどのような校長であったのかということが書かれています。そこでも紹介されていますが、「子どもの心の琴線に触れる生徒指導」を私は行ってきたと思っていますので、限られた時間ではありますが、本日はそのようなお話ができればと考えております。

理論武装

後で久保先生から理論に関するお話があると思いますが、ちょうど「理論武装」がこのような生徒指導を行うようになった大きなきっかけとなるものでした。私が新任で赴任したのは八条中学校でした。南区にありまして、子どもたちが元気なところでした。その頃、生徒指導といえば勘と経験でした。それでずっとやってきたのです。何年かすると、自分が生徒指導の中心を若くして担うようになりました。しかし、職員会議で話をしても全然通じません。他のお年寄りの先生は知らん顔になるのです。「どうしたらいいのだろう」ということを考えていて、八条中学校から次の学校へ移ったときにちょうど声を掛けてもらったのが、生徒指導研究会になります。

当初は「自分は学校を守らなければいけない」との思いから、学校の外へ出たらいけないと考えていました。自分が外に出ているときに学校で何かあったらいけないな、と。いわゆる「井の中のかわず」の状態でした。それが外へ出たところ、途端に目が開けました。この学校はこうしている、ああしている、といった他校の情報がどんどん入ってきて、視野が広がったのです。さらに、今度は職員会議など色々なところで提案をしていくのに、こうあるべきだ、こういうことだからこれをしなければならない、という話をする必要があることに気づきました。そこで、理論武装を行うようになりました。

生徒指導を担当している教員の中には、中学校だけでなく小学校の教員も高校の教員も含まれますが、勘と経験だけでやっている人がいます。そうすると、行き詰ってしまふと駄目になります。後でも触れますが、西院中学校にいたとき、大荒れに荒れていました。その原因は、それまで生徒たちを抑えていた怖い先生が、ある生徒に殴られて負けてしまったことにあります。それから学校が大荒れに荒れました。怖さだけで抑え込んでいたので、そういうことになってしまいました。だから、抑え込むやり方ではなく、こういう生徒を育てていこう、そのためにはこうしなければいけない、という理論的なものをしっかり持つておく必要があるのです。

カウンセリング

そうして理論的に導き出したのが、「力の生徒指導から心を育てる生徒指導へ」という主題になります。補導から生徒指導です。なぜかという、本来、生徒指導は補導とカウンセリングの両輪で日本に入ってきたからです。ところが、富国強兵のために、カウンセリングは必要とされなくなりました。補導だけを、富国強兵のために使うようになりました。

私が教員として採用された頃になって、もう一度学校にカウンセリングを入れていこうという動きが見られるようになりました。ただ、今まで補導だけを行ってきた先生たちは、「何を言っているのだ、カウンセリングみたいなものは邪魔だ」という感じでした。それは、カウンセリングについての誤解があったこともあるのですが、今はもう随分両輪になってきたと思います。カウンセリングも、昔に比べると随分変わりました。生徒に対して注意を全くすることなくただ聞いているだけの状態から、きちんと注意もしつつカウンセリングもしていこう、という生徒指導にこの頃から変わってきたのではないかと思います。

修学院中学校への赴任

私が修学院中学校の校長になったとき、今の門川市長がちょうど教育長で、「長者先生、頼んだよ。2人も亡くなっているからね」と言ってこられました。生徒指導の指導主事をしていたから、新聞記者が来たりする際に対応のお手伝いをしていたので、修学院でちょうど事件があったばかりなのは知っていました。しかし、もう一つあるのかと思って、校長として赴任してから記録を見たら、昭和54年にプロレスごっこをして1人子どもが亡くなっていました。だから2人なのです。二度とそういうことがないような学校をつくってほしいと言われて、これは大変だと思いながらやりました。

そのときに用いたのが「子どもをキレさせないための10ヶ条」というものです。学校づくりのアイデアとして、これを利用させてもらいました。この10ヶ条がどこまで正しいのかという点については議論があるでしょうが、うまいこと利用できるのではないかという考えがありました。

群れて遊ぶ機会

その10ヶ条の2つ目に、「幼い頃から「群れ遊ぶ」機会を作ろう」という項目があります。校長になってから小学校を訪問する機会があると、できるだけ子どもたちが群れ遊ぶ時間を作ってほしいということをお願いしました。修学院中学校の校区外にある小学校に行っても、そういうお願いをしました。

それはなぜかという根拠についてお話ししましょう。確立している学説かどうかは分かりませんので聞き流してもらっていいのですが、脳は、興奮をすると制御ができない状態から、皆さんのように興奮と制御の切り替えが素早くできるように発達していくそうです。この脳の発達に関して、信州大学の先生がなさった研究をご紹介します。ギャングエイジといって、小学校の2年生や3年生くらいになると、興奮すると駄々をこねだして暴れ出したら止まらないことがあります。そうした興奮型の出現率がどうだったかという、1969年の日本ではちょうど小学校の1年2年ぐらいがピークでした。それが、少し前になりますけれども今回の調査では、ピークは小学校の6年生ぐらいです。ここから示唆されるのは、脳の発達が遅れているということです。

小学校の2年生3年生ぐらいでは、女性の先生でもまだ相手は小さいからぐっと抱えて落ち着かせるということが出来ます。けれども、小学校6年になると身体の大きい子がたくさんいます。それが暴れ出したら、男性の先生も含めて、どうにもなりません。なぜかという、脳の発達が遅れてきているのではないかというのが、まず考えられる要因になりま

す。皆さんもご存じのとおり、制御できる脳というのは、前頭連合野のちょうどこの部分で人間脳と言われる部分になります。そして、この動物脳とは異なる人間脳の発達、近年遅れているのではないかと考えられるのです。

その原因は次のように考えられています。脳や自律神経系は、本来少年期の子どもたちが自然と触れ合いつつ、集団で活動する中で発達していくものです。しかし、現代の社会はその機会を、子どもたちから奪ってしまいました。だから集団になって群れて遊ぶことが大切だと考えられるのです。私が教員をやっている間、文科省は個人の個ばかり言っていた時期がありますが、今は集団の大切さについても触れています。なお、このような映像資料がありますので、参考に見てください。

〈映像資料：出典「映像資料：心理学者ハリー・ハロウ氏のサルの実験」〉

アナウンサー：こちらは一種のユートピアというのだそうですが、お母さんと森の中にいるのと同じような、生れ落ちてからお母さんと一緒に生活をしています。檻があるというだけです。子どもだけが出られる出入り口があるのです。

解説者：非常に家族的な中で生活をしていますね。

アナウンサー：家族構成のような中で生活するのが好きなようですね。

解説者：そうですね。群れを成していますからね。

アナウンサー：子どもだけが出られる穴があって、真ん中に遊び場があるのだそうです。自由に子どもたちが退屈すると、ここに出てきて遊んで、飽きれば親のところに帰れるのですね。

解説者：これを見ると、子どものときは遊ぶということが大事だと分かります。

アナウンサー：大事なのですね。

解説者：ところがそれでも、いつでも親のところに帰れる、後ろに親がいるということが非常に安心感を与えるのです。

アナウンサー：安心して遊んでいるわけです。親は見えていますものね。

解説者：そうですね。

アナウンサー：これは20年にわたる研究だそうです。

解説者：普通のニホンザルでも、生まれてしばらくの間は、しょっちゅう頭やしっぽや手を掛けていますね。

アナウンサー：親がですか。

解説者：はい。ちょっと離れてもすぐ戻って来られるようなところにいるということです。

アナウンサー：ここで、そういうふうに自然に近い環境を作って、6カ月目だそうです。そこへ同じ6カ月ですが、これなのですが、親からも兄弟からも友だちから離されて育てられた子どもを入れると、こうなってしまうのです。

解説者：どうしていいか分からないのです。そこにいるわけです。

アナウンサー：これはいじめているわけではないのですが、むしろ仲間に入れよ、遊びに入れよというのかもしれませんが、全く駄目です。

解説者：子ども同士で一緒に遊ぶということが本当に必要で、将来社会で生活するときに非常に関係があると言っています。

アナウンサー：一人っ子で大事に育った子が、幼稚園に行きます。これは人間の場合には言葉がありますから、ある期間を置けばなじみますが、始めはとても駄目だそうですね。

解説者：この実験でこれもはっきり見えますね。

アナウンサー：これは親からは離しましたが、やはり6カ月の子どもで、子どもたちだけが普段触れ合ってい

るようにした子ザルたちだそうです。しかしこれがのびやかではありません。同じ環境で育ったものだけで、4匹が抱き合っています。自分の仲間だけです。

解説者：他とはなじまないのですね。

アナウンサー：これが何を暗示するものなのか知りませんが、こういう実験をとおして、子ども時代の社会関係というものが、サルでも類人猿でも正常な成長のために非常に重要だということが強調されているようです。

このように、集団の大切さと、それから群れ遊ぶということを重視して、学校づくりをしてきました。

自己評価・自尊感情

次は自己評価、もしくは自尊感情についてです。資料に掲載しているとおり、日本の子どもたちは非常に自己評価が低く、アメリカや中国・韓国の子どもたちと大きな差があります。

もう一つデータがあります。他人に比べて優れているかという質問に対して「はい」と回答したのは、日本の子どもたちは35%、アメリカなら85%、中国は95%です。ずいぶん大きく差があります。それから、自分は人並みの能力を持っているかという質問に対しても、「はい」と答えたのは、日本の子どもたちが58%、アメリカ91%、中国94%です。この話があるところでしたときに、聴衆の方が「日本では和を重んじるから、周りの子どもよりも自分はできているなんてあまり外では言わないでしょう」というご指摘をされたのですけれども、多分そういうことがないような聞き方をしているように思います。

高校生に対するアンケートでも同じような傾向がでていましたので、これがおそらく現状なのだろうと考えています。

規範意識との関連性

さらに、警視庁の生活安全部少年育成課が公表しているデータがあります。これを見ても、規範意識が高い群の子どもたちは、まずは自分が好き、保護者にかわいがられている、友達から信用されている、長所があるなど、自分に対して肯定的なイメージを持っています。警視庁生活安全部少年育成課の考察では、規範意識の高さと自己イメージが関連していることになります。規範意識が低い場合は、自己イメージも低くなっています。ここから、何をポイントに子どもたちを育てていかなければいけないかが分かるのではないかと思います。

もう一つ同じ研究ですけれども、規範意識の高いグループと低いグループが、家庭の中でそれから学校の中で、友だち関係の中で、どれくらい満足をしているかを示したデータです。これは見ていただいたら分かるとおり、規範意識の高い群は低い群に比べると満足度が全然違いますよね。ここなのです。子どもを育てていく際に自尊感情を高めることがいかに大切か、自尊感情が子どもたちを伸ばしていくのではないかと考えました。そこで、自尊感情を高める取り組みを学校として行いました。それが10ヶ条の4番目にある「機会をみつけて積極的にほめよ」につながります。今日は時間の都合上、先ほど取り上げた2番目と、この4番目について詳しく説明します。

積極的にほめる

大人たちはほめることが下手で、教員もそうです。子どもの悪口を先生の中で言いあうと目が輝くのですが、ほめるほうは下手です。

名古屋工業大学の田中准教授がやった実験を紹介します。右利き男女48人を対象に、左手を使ってキーボードで5桁の数字を30秒間にわたって、できるだけ多く何度も入力する運動機能の実験を行いました。実験は12回行われ、実験後48人は「他人からほめられる」、そして「他人がほめられるのを見る」、それに「自分の成績を見る」だけの3つのグループに分かれました。つまり、「ほめられる」「他人がほめられる」、それから「何もほめられない」というグループになります。そして、翌日に同じ実験を行うと、「他人からほめられる」グループは、入力回数の成績が20%よくなっていました。他の2つのグループはいずれも、14%の伸びにとどまっているということで、「ほめると伸びる」ということの科学的な裏付けがとれました。子どもの教育や脳卒中などのリハビリの現場で、どのようなほめ方をすると効果的かさらに研究を進めたいと、田中准教授は述べておられます。

聞くところによれば、日本人の75%がマイナス思考で、他人の悪口を言っているときが一番安定した顔をしているそうです。だから、まずは自分で意識して良いところを見つけたり、ほめたりということをしていかなければいけないのです。それを学校の現場では、教員にしてほしいのです。私も校長として一生懸命先生方をほめました。そうしたら先生方は一生懸命生徒をほめてくれます。そういった良い循環をめざして、学校づくりを行いました。

西院中学校での取り組み

私は平成元年に西院中学校に赴任しました。このときの西院中学校は、京都市で一番荒れていると言われていました。京都市教育委員会の生徒指導課の指導主事が一番多く補導問題で訪問した学校だったからです。既に赴任していた先生から、「殺人以外は全部あった」と言われました。本当に大変でした。しかし、それまで自分がずっと培ってきたものをここで発揮できたので、最終的に自信にはなりました。

まず、校舎に入るとベルが鳴っているのに、生徒たちがうろうろしています。前からいた先生は、サファリランドと言っていました。校舎がサファリランドだと言っているのです。教室に全然入らないのです。多分授業が分からない、面白くないというのがあったのでしょう。そこで、まずは分かる授業をしようということにしました。授業が分からないし行っても面白くないではなくて、分かるし面白いなというような授業を少しでも増やしていこうということです。

それから、エネルギーの正しい発散ができるようにしました。やんちゃをするすごいパワーを持っているからです。そのパワーを部活動に引っぱっていこうと、ラグビー部や野球部やサッカー部、女子だったらバレーボール部に入れました。

道徳教育

また、道徳教育にも力を入れるようにしました。西院中学校に来るまでは、道徳教育はまだるいというイメージしかありませんでした。生徒指導を担当している教員には、そういう人が多くいました。道徳などまどろっこしいことを言っていられないと思っているのです。

ちょうど西院中学校は、文科省が指定する道徳研究の発表校になっていました。こんなに荒れていて大丈夫なのかと思っていたのですが、私が行ったときは指定されてちょうど2年目でした。そのときに、いわゆる参加型の道徳教育に取り組みました。2年生が一番荒れていたんで、2年生の例を言いますけれども、グリーン活動というものを行いました。何年何組誰々と名前をつけた大きいプランターが1人ずつ与えられ、種から芽を出させて花を咲かせるという活動でした。その当時、今は京都では育成学級といいますが、全国的には支援学級というのでしょうか、その子どもたちが作った花の畑をきれいにしても、毎回踏みめにじられるようなことがありました。大体この生徒が犯人だというのは見当がついているのですが、夜中にそういうことをするので、確証がありませんでした。そんなとき、犯人だと思っていた生徒のプランター

の芽が出てきたのですが、枯れてしまったのです。どうするのかなと思っていたら、芽が枯れていたのにきちんと出ているのです。おかしいなと思ったら、隣の子のプランターの芽がありません。取って自分のところに入れたのです。そして、その頃から、育成学級の畑が全く踏みにじられなくなりました。そういう取り組みから何か子どもの心が変わったのかなと感じました。それから、道徳教育はすごいなというイメージを持ちだして、私ものめり込んでいきました。

私は京都市しか分かりませんが、京都市で生徒指導をやっている人たちは、皆が最終的に道徳教育にのめり込んでいきます。心を育てなければいけない、というように思うようになるのでしょう。

教育目標

修学院中学校に赴任したときに掲げた最高教育目標が、「世界でいちばん通いたい学校にしよう」というものになります。京都市教育委員会がいつも唱えている「一人一人の生徒を徹底的に大切する」という趣旨を踏まえたものです。ちょうど体育館の外壁に、今は印刷されたきれいな看板になっていますけれども、国語の先生に書いてもらった看板を掲げました。地域の人にも分かってもらおうということです。

さらに、その年の具体的な教育目標を「たくましく生きる力の育成」「人権を大切にする心の育成」の2つにして、誰でも覚えられるようにしました。難しいことをずらっと並べても駄目だと思うので、絵に描いた餅にならないようにしました。

起業家精神の涵養

「たくましく生きる力の育成」については、あとの報告でキャリア教育として説明されるようですが、起業家精神を涵養する教育としてアントレプレナーシップ教育を取り入れました。今からご覧いただくTVニュースは、3年生がバザーを行っているところを放映したものです。会社組織をつくって、商店街でバザーをして、商店街を活性化する取り組みになります。この写真は、そのバザーで売の商品を、地域の人たちと一緒に、お父さんお母さんと一緒に作っているところです。地域の方、それから高齢者や保護者と会話し交流する機会になりました。こうやって皆で力を合わせて作るのです。では、バザーのところだけをご覧くださいましょう。

〈TV ニュース 出典「TV ニュース：ニュース映像」〉

アナウンサー：10月28日土曜日、左京区的一条寺商店街で、おいでやすフェスティバル in 修学院一乗寺が行われました。この催しは修学院中学校の3年生が行ったもので、生徒たち自らアイデアを出して制作した商品を商店街で販売し、地域の活性化を図りました。修学院中学校では、生徒たちが想像力、判断力、チームワーク力、コミュニケーション力などを身に付けるために起業家教育を行っています。この催しはその集大成になるもので、自らのアイデアや知識を生かした商品を作って、それを自分たちで売り込み、収益を上げるという起業家さながらの体験となりました。商店街には全部で41の店が出され、中には生徒たちが自らの手で繁殖させたカブトムシの幼虫を販売しているグループがありました。

生徒：これはカブトを捕まえて、たまごから幼虫に成長させたものです。

記者：自分でやったのですか？

生徒：はい。

記者：どうしてカブトムシの幼虫をしようと思ったのですか。

生徒：男の子にはロマンです。懐かしいです。

記者：一番左にあるのは使い捨てないカイロで、生徒たちが理科の知識を生かして作ったものです。

生徒：中のスイッチを入れると、カイロが発熱します。うちの担任が理科教師というのもありまして、理科室が使える、理科的な商品を作ってみたいということで作ってみました。

記者：売れると思いませんか？

生徒：はい。今日は好調です。1時間で残り3つほどになり、25個販売しました。

取材を受けていたのは中学3年生なのですが、中学3年生がよくあれだけ話しますね。彼が卒業した後にもそういうことを言ったら、照れていました。もっと見ていただいたらいいのですが、こうした活動に取り組み、いわゆる個々の存在感や、自分がやりたいことを一生懸命できるという場を設定できたのかな、と思っています。

人権を大切にする心の育成

もう一つの教育目標である「人権を大切にする心の育成」については、ライフスキル教育と呼んでおりました。よりよく生きる力を育てる教育ということで取り組みました。

これは、皆さんもご関心があるのではないかと思います。自尊感情や薬物に手を出さない意思決定力を育むものになります。当時は援助交際も問題になっていました。そこで、ストレスに対処する力やコミュニケーション力とともに、自尊感情も養っていききたいということで取り組んでいきました。

平成14年に修学院中学校へ赴任したとき、生徒会が一生懸命頑張ろうとしていました。そこで、自分たちの学校をどうしたらいいのだろうかと考え、学校の外側にも目をむけようということで、NPOの団体を紹介しました。世界に目を向けて、それから自分の足元を見つめようという取り組みを始めました。そして、フィリピンを支援する活動を、生徒会を中心にスタートさせました。NPOの人たちに生徒会の役員たちが会って、生徒たちが自ら取り組むことに決めたのです。

修学院中学校に赴任した当初は、地域から非常に冷たい目で学校は見られていました。中学生は怖いといった感じで見られていました。けれども、最近の修学院中生はだんだんよくなってきた、あいさつをするようになってきたと言われるようになり、地域の方々も協力しようということで、フィリピンを支援するためのアルミ缶集めを手伝っていただけのようになりました。

また、フィリピンの人たちに、豚を飼って育ててもらおうという取り組みも行いました。子豚と餌を提供して、代わりに育ててもらいます。そして育った豚を売って、子どもの学費にしてもらいます。それから、バザーなどで集まったお金については、奨学金制度を設けて、制服代や本代、教科書代、学費などに使ってもらうようにしました。

では、生徒たちにどんな影響があるのか。NPOの学生ボランティアたちが、寄付をしたお金がどうなったか、それから鉛筆など渡したけれどもどうなったかということを、学校に報告に来てくれます。生徒たちが寄付した鉛筆がどうなったのかということが分かるようにしました。大きい団体に寄付してもよかったのですが、そこまでの規模でないNPOであれば実際に自分たちの寄付がその後どうなったかということがよく分かるのです。あなたたちが寄付した分はこうなりましたよ、ということを教えてくれるのです。これも自分が人の役に立っていることが実感できるという点で、自尊感情を高める効果がありました。

見守り活動

自尊感情を高める取り組みとしては、見守り活動も行いました。見守り活動は、地域の方々が平成14年から取り組まれていたものです。これに中学生も加わってくれないかという声が掛かりました。そこで、平成16年から学校でも取り組むようになりました。この活動も、まず生徒会に話をして、生徒会がやろうと決めたので始まりました。そして、生徒会が全校生徒に呼びかけて、この修ちゃんバッヂを付けて、小学校以下の子どもたちを見守ろうという運動が始まりました。

〈映像〉

生徒会の役員：中学生は大人と同じです。これが、私が中学生になって学んだことです。小学生から1つ学年が上がるだけと思っていた私は、中学生ということの大きさをまだ分かっていなかったのだと実感しました。4月12日に行われた会議に、福祉協議会の方が来られました。その方のお話は、深く印象に残っています。内容は今年からは守る立場になるというものです。昨年まで守ってもらう立場だったのに、今度は守る立場です。中学生の責任の重さを改めて実感しました。これから様々な苦難や問題に立ち向かわなければならないこともあると思いますが、中学生としての自覚、責任を忘れずに頑張りたいと思います。

皆さんのお手元に、私のことを取り上げた新聞記事を配布してもらいましたが、その裏側に印刷されている道德の副読本は、見守り活動を取り上げたものです。学校に直接取材に来られたのではなくて、地域の団体に取材に行かれて、このように道德の副読本に掲載されたのです。地域と一体化した取り組みだったのではないかと思います。

認知症サポーター講座

子どもたちを守るだけでなく、今度はお年寄りを何とかしようということで、認知症の方を守っていこうという取り組みもしました。人を大切にする活動に進んで関わることで自信を持ってもらうためです。そこで、認知症サポーターになるための講座を開催することになりました。

今はもう大学生、短大生になる世代から始めましたので、かなりの人数のサポーターが修学院中学校から出ているはずです。まずは認知症サポーターの講習会を1時間目に合同で開き、2時間目は教室へ帰って、地域の方々にも入ってもらい、一緒になってどう対応すればよいのか考えてもらいます。認知症の方に会ったときにどうしたらいいのだろうという話し合いをして、このようにロール・プレイをします。

〈映像〉

生徒：今日はどこに行ったらいいですか。

地域の方が演じる認知症の高齢者：どこに行きましょう。

生徒：家はどこにあるのですか。

地域の方が演じる認知症の高齢者：それが分からないのです。

生徒：そうなのですか。

地域の方が演じる認知症の高齢者：・・・。

生徒：家の電話番号に電話を掛けましょうか。

このようなことをするのですが、色々な新聞にも掲載されました。また、生徒の保護者も巻き込んで同じように受講してもらっています。その結果、親子で認知症のおばあちゃんを助け、それが新聞に掲載されたこともありました。

その他の取り組み

あとは、災害が起こったときに、子どもたちが自主的に救援の募金をするなどの活動もありました。また、お手元の資料に掲載しているのは、地域の方々と一緒に掃除をしているところを撮影した写真になります。野球部と地域の方とが一緒に掃除をしています。これは、バスケットボール部だと思いますが、最後にあいさつをしているシーンです。

非常に重苦しい事件があったあとで、子どもたちの心を育てる道徳教育を進めていこうということで、このような様々な取り組みを行いました。文科省指定の道徳研究会の研究発表で公開授業も行いました。

時間が来ましたので最後になりますが、「心の琴線に触れる」ために講演会も開きましたので、紹介しておきます。これについては、映像をご覧ください。

〈映像〉

講演者：本日はご来場くださりまして、ありがとうございます。私は2006年12月の終わりに病気が悪くなり、それからずっと車いすの生活を送っています。そのときは、寝たきりの状態でした。でもそこから家族、友だちの声に支えられながら、そして、リハビリの先生、お医者さん、看護師さんみんなに支えられ、今では車いすでどこにでも行ける体になりました。本当にありがとうございます。

できることが増えていくということもあるのですが、実は今私の体は呼吸機能が少しずつ悪くなってきています。呼吸機能が悪くなってきていまして、今では夜寝るとき、マスク式の人工呼吸器を使って寝ている状況です。昼間起きているときにも、時々苦しいと思うようなこともあり、次に無呼吸の発作が起きたときにひとりでいたら、命の保証はないですとお医者さんに言われてしまい、明日から入院して喉に穴をあける手術をすることになりました。

喉に穴をあけるというのは、お話することはできるようになるということなのですが、私のように歌を勉強してきたものにとっては、とてもつらいことです。歌は歌えなくなるとお医者さんに言われています。覚悟しなさいと言われてから、時間がたったのは私が覚悟できなかったからではなくて、自分の中で歌を手放すのはつらいという思いがあったからです。それでも色々な人に話を聞いて、色々な人に相談して、そのときに声と命はてんびんに掛からないと言って下さった人がいました。そのとおりだと、はっと思いました。私は歌う声は失ってしまいます。でもそれで命がつながるのであれば、そのほうがいいなと思っています。今日皆さんとたくさんの方、外にも後ろにも立っていただいているのですけれども、そんなにたくさんの方に来ていただけるなど私は思っていませんでした。たくさんの人に支えられて、私の歌を聞いていただけるのだととてもありがたいと思っています。

声は失いますが、こんなにたくさんの方に支えられて、これほどたくさんの人に会えなくなると思うと、そのほうがつらいなと思っています。明日から入院して手術をしますけれども、これからも支えてほしいと思います。

講演者は手術したあとなのです。3カ月ほどたっているから自主呼吸できると思っていたら、自主呼吸が戻りませんでした。講演は彼女の強い希望で、人工呼吸器を付けて話に来てくれたのです。本当はもう少し見ていただきたいのだけれども、これが心の琴線に触れる講演の例です。

耳が聞こえないユニット2人組のプロの演奏者を呼ぶときには、40万円ほど費用がかかりました。公立の中学校では簡単に出来る額ではありませんでした。だから、生徒1人ずつからお金を徴収することになりました。私が全部責任を持って説明するというので、年に1回の徴収日にお金を集めて開催しました。子どものためになるのだから、ということで。お金がないからこのぐらいで留めておこう、というのではなくて、良いと思うことは何とかしてやろうとしました。映像でご覧いただいたとおり、子どもたちの心の中に届いたのではないかと思います。

いじめについて

油谷先生がよくお分かりですが、いじめはありました。ただ、いじめはいけないのではないかと言うと、わりと早く理解してくれました。最後には涙を流してごめんなさいと謝ることもありましたし、こちらの思いが早く心に届くようになったのではないかと考えています。

こちらのデータは、私の最後の年の学校アンケートです。「楽しく学校に通えているか」という質問に対して、90%以上の子どもたちが「とてもそう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答しています。それからこれは、「いじめや嫌がらせを受けていないか」という質問ですが、90%以上は「ない」と回答しています。もっとも、このときのアンケートの取り方に問題があって、小学校などで過去にあったことも全部入るような質問にはなっています。だから、今のアンケートの取り方は「現在」という言葉を入れています。「ある」の回答数は若干減っていますし、私が退職してからもう6年になっていますけれども、他の項目についても回答傾向があまり大きく変わっていないし、良い面がもっと増えているところもあります。アンケート結果についてご質問がありましたら、後のパネル・ディスカッションで出していただけたらありがたいと思います。それでは、今日はこの辺でまずは終わります。どうもありがとうございました。

〈一同 拍手〉

成田：長者先生ありがとうございました。次に当研究所所員の久保秀雄より「非行防止はいかにして実現したのか」というテーマで研究調査報告をさせていただきます。それでは久保先生よろしくお願いします。